

ジャフリカンとして生きる

Living as a Japanese African *Africa ne Japan wange*

三浦 ノア

MIURA Noah

こんにちは。三浦ノアです。アフリカンキッズクラブで2018年4月からインターンをしている18歳です。これまでの自分の人生を主観的ではなく、客観的に振り返ったら面白いことになったので、このエッセイを通して皆さんに共有したいと思います。

特に意識していなかったアイデンティティ

私はハーフではありますが、日本人です。ただ、幼いころの私は、自分が日本人であることもアフリカの血を引いていることも、特に気にしてはいませんでした。幼稚園の時に、友達の1人が「真っ黒くろすけだー」と言いながら逃げることがあったのですが、それはささやかな日常に過ぎず、気にもなりません。もはや、それが当時の鬼ごっこようになっていました。(笑) 小学2年生の頃は、自分の肌の色ゆえに、からかわれることもあったのですが、その経験はこれまでの人生の中で、足を引っ張っているわけでもなく、おそらく「自分はこんな人間だ」という信念はなかったで、そこまで繊細にならなかったのだと思います。

第二のふるさとを知ってから 人生が変わり始めた

小学4年生の時に初めてウガンダを訪れました。そもそも、私とウガンダのつながりは父親にあります。彼は、元々南アフリカの生まれなのですが、ある時に家族でウガンダに移り住みました。今でもウガンダには、父方の祖父を始めとして、叔父・叔母、そしていとこ達が住んでいます。というわけで、ウガンダにも私にとってのもう一つの家族たるコミュニティがあります。そんな国を初めて母、妹、弟、母方の祖父と訪れた時、現地の人々の歓迎は度肝を抜くものでした。訪れる村々では、人々が喜びを表す独特の叫び声を上げていました。さらに、初めて訪れた父方の祖父の村

では、「ヤギ1頭をあげます」と言われ、「え？」と仰天する間もなくそのヤギをその場で「調理」してもらい、ご馳走になりました。こうして、生きている動物をワイルドに最初から最後まで調理する、という風景は日本であまり見ないため、私は思わず目を背けてしまいました。

それでも、当時から自分は何者であるのかを疑い始めるようになりました。ウガンダを訪れたことが、「自分はアフリカの血を引いているんだ」というリマインドになり、今後の人生で自分の「誇り」を見つけることにつながっていきます。

僕はウガンダ人ではない

初渡航から4年後、思春期に入りたての私はウガンダに父と飛び、初めて「観光客」ではなく「住民」として、同じ釜の飯を食う人として約1年間生活しました。そうして直面したのは、「ウガンダ人になりたい」という所属欲求です。生活も慣れてくると楽しくなってくる上、自分もローカルの人と同じであると錯覚し始めます。ただ、現地人から見て、私はひとりの外国人(現地の言葉 = Oluganda では 'Muzungu' という)という認識は変わらなかったようで、それを受け入れるのに私はとても苦労することとなりました。外を歩けば、この様に Muzungu もしくは Muchina (中国人を意味する) と言われ、少し嫌な気持ちになると同時に、自分が一体何者であるのかを非常に疑問に思いました。

そんな中、私のルーツとしてのリソースで、まず強烈な印象を与えられたのが、イスラム教です。父方の家族は皆イスラム教徒なので、現地ではモスクに行く機会が何回かありました。そういう生活の中で、ノアという名前が、イスラム教では「ヌーフ」といって超重要な指導者の名前でもあることを知り、人生で初めて自分の名前を誇りに思いました。

みうら のあ: 2000年3月13日東京生まれ。日本人と南アフリカ人のハーフ。2006年、小学1年生の時に、FIFA ワールドカップドイツ大会のエスコートキッズに選ばれる。同年、ミュージカル「星の王子さま」に毛虫役のキャストとして出演。高校卒業後、在日ウガンダ人の会の一メンバーとして活動するかたわら、アフリカンキッズクラブのインターンとして今年4月より稼働中。ブログ: mugichoco614699241.wordpress.com

‘From Which Country’ ではなく ‘YOU’

国際人教育に力を入れている私立の高校に進学した私は、学校のプログラムで、高校2年生の時にニュージーランドへ留学しました。多民族国家であるこの国には、「外国人」という概念がなく、出会う人が皆仲間である、という感覚でした。出身の国は関係なく、誰もが素晴らしい一個人という考え方に会って、私は胸がときめきました。奇しくも日本人とみられることは滅多になく、むしろ日本出身と言うと驚かれて爆笑される程でした。

そういった国のバリアを超えた受け入れのマインドがニュージーランド人には浸透しており、私は日本人でもなくアフリカ人でもなく、「ノア」でした。そうやって現地のホストファミリーや友達の人間的温かみを感じた留学生活も終わりを迎え、空港で「さようなら」を言おうとする時に、私は感極まって涙が止まりませんでした。学んだことに、「絆」という言葉があります。日本にいる時はあまり意識しない様な言葉ではありませんが、それは本当に自分の気付かないところでできているのだと、留学を通じて痛感することとなりました。

麦チョコとして、 そして「アフリカ系日本人」として

高校時代、私は「麦チョコ」と呼ばれていました。これをすごく肯定的に捉えるあまり、もはやその名前を自分のブログに取り入れてしまいました。なぜかという、私は自分の肌の色が黒い（どちらかと言うと茶色ですが）ことに誇りを持っていて、その色はいつも私がアフリカにルーツを持っている、ということをおいさせてくれます。そういったことを分かってか、そう呼んでくれる友達に恵まれたことは、間違いなく財産だと思っています。

また、ずっと疑い続けてきた「自分は何者であるのか」という問いも、「アフリカ系日本人」というとこ



妹・弟とともに「ほっぺたが落ちる」ほどおいしい食事中
2018年6月 千葉県鴨川市

ろに今では落ち着いています。日本人というベースに、アフリカ人という「味」を付けて、もっと面白い人にこれからなっていきたいです。

高校卒業後は、ギャップイヤーを取っています。その中で、在日ウガンダ人の会のユースメンバーの1人として、ウガンダをもっと知ってもらう活動に携わっています。アフリカンキッズクラブのインターンとしても、ナイジェリア子どもの日の盛り上げ役をやったり、デイキャンプの運営のお手伝いをしたりして活動しています。そうやって、これからももっとアフリカに触れて、自分の心を豊かにして、最終的には周りの人も豊かにしてゆきたいです。

おまけ

弟である三浦ルイス（小学3年生）にインタビューしてみました。フットサル大会の「キッズワールドカップゲーム」そして、その前に参加したワールドランナーズジャパン (WRJ) の「チャリティマラソン」について、話してくれました。

—それぞれのイベントに参加して、どうだった？

チャリティマラソンは、まずアフリカの人のために頑張ってる走れてよかった。大勢の人と協力するのが楽しくて、息が苦しくなっても、頑張ろうと思えた。キッズワールドカップゲームは、他の国の人（セネガル、コロンビア、ポーランド）と楽しく試合ができて、最初は顔も分からない人たちと最後は仲良く友達になれてよかった。ゴールを決めて、チームのみんな喜んで瞬間が心にのこった。

—2つのイベントに参加した後、変わったことや新しく始めたことはある？

チャリティマラソンで走ってから、自分のことだけに真剣になるのではなく、他の人のためにも頑張ろうと思うようになった。あのフットサルのワールドカップの後、国が違う人どうしても楽しく遊べることに気付いたので、英語の勉強に力が入り始めた！



イベント「今のアフリカ」に飛び入りで参加
2018年6月 東京都千代田区・日比谷公園